

教育心理学コースの紹介

本コースは、教授・学習や誕生から終末に至るまでの人間発達のしくみ、ならびに発達過程における障害や支援ニーズに対して、心理学的観点から多面的・多角的にとらえ、そのメカニズムと支援方法について研究するコースです。

本コースは、教授学習心理学、発達心理学、発達障害学の3領域から構成されています。また、各領域を担当される先生方の専門分野と具体的な研究指導テーマは以下の通りです。

【教授学習心理学】

教授者や学習者のどのような心理過程・思考過程が、教育実践を有効なものにするかといった問題について研究します。

○工藤与志文 教授

[研究内容]

理科や算数・数学といった教科学習をフィールドに、授業における学力形成の問題について、教育心理学の立場から研究しています。特に、学習者の認知・思考・推論のあり方が科学的認識の形成に及ぼす影響および学習者の心理的特質を考慮した教授法の開発に関心を持っています。最近では、授業過程の心理学的分析や授業者の授業観・教材観の影響などについても関心を広げています。

[指導テーマ]

- 中学生における文字式の操作可能性と機械的公式観の関係
- メタ認知活動の促進を目的とした学習指導が文章産出に及ぼす影響
- 中学生における等号理解水準と方程式の文章題解決との関連について
- 既有知識内の矛盾認識が誤ルールの修正に及ぼす影響
- 学習者の認識論的信念と指導方略が概念変容に及ぼす影響

○深谷優子 准教授

[研究内容]

読解や作文などの言語的な情報を中心とした理解と産出について、心理学的な立場で研究をしています。これまで研究してきたテーマとしては、文章や図表などの情報からの教授・学習を中心として、どのようなテキストが学習を支援できるのか、読解力（リテラシー）はどのように育成できるのか、複数の情報から統合的に理解をいかに構築するのか、俳句などの詩歌をどのように理解するのか、essay

(小論) 作成の際の他者との共同推敲はどのような影響をもつのか, などがあります。

[指導テーマ]

- 教材の難易度が大学生におけるリスニング指導法としてのシャドーイングの効果に及ぼす影響
- 数学の学習方略の有効性認知に数学信念が与える効果
- つまづき明確化方略の教授が大学生の質問生成に及ぼす効果—学業的援助要請のスタイルに着目して—
- 替え歌記憶法が非単語の記憶に与える効果
- 表の完成作業及び表の呈示が大学生の説明文理解に及ぼす影響"

【発達心理学】

乳幼児期・児童期・青年期・成人期・老年期という人間の誕生から終末までの一生涯を対象として人間発達に関する諸問題を研究します。

○長谷川真里 教授

[研究内容]

道徳性と社会性の発達をテーマに, 主として幼児から青年期前期を対象とした研究を行っています。これまで, 罪悪感や同情などの道徳感情の発達および向社会性との関係, 異質な他者に対する寛容性の発達などを検討してきました。最近は集団間関係にも興味があります。具体的には, 内・外集団メンバーに対して感情帰属, 道徳判断, 向社会的行動がどのように(そしてなぜ)異なるのかということ発達心理学の観点から探っています。

[指導テーマ]

- 幼児期の他者感情推測
- 子どもの援助行動における in-group bias
- 道徳判断に影響する要因: 意図情報の違い
- 仲間関係の排他性と受容性の発達: 仲間排除が正当化される要因
- いじめの長期化・深刻化における傍観者の役割

○神谷哲司 准教授

[研究内容]

現代日本社会における青年期・成人期の心理学的な諸課題を生涯発達という枠組みから明らかにしたいと思っています。これまでは「役割」という概念をキーワードに, 青年や成人にとって, 「子どもとかかわること」がどのような意味を持つのかについて考え

ながら、育児期家族における親や夫婦を対象とした研究や、保育者の労働環境とキャリア発達に関する研究をしてきました。最近では、社会構造の変動に伴う現代的な成人期移行の問題や、成人期のファイナンシャル・リテラシー、感情労働をはじめとした感情制御の問題にも関心を寄せています。

[指導テーマ]

- 大学生の進路選択過程自己効力に代理経験が及ぼす影響 —モデリングと効力予期の観点から—
- 育児期母親における乳児の情動認知に関する研究 —母親のアタッチメントタイプに着目して—
- 中学生におけるストレスへの対処行動に関する研究 —友人からのソーシャル・サポートとセルフコントロールに着目して—
- 女子大学生における自己信頼感および他者信頼感と依存性との関連 —成熟した依存性の観点から—

【発達障害学】

知的障害、重複障害、自閉症や学習障害など特別な支援を必要とする人々の心理的支援や教育的支援について研究します。

○野口和人 教授

[研究内容]

知的障害を含む発達障害のある子どもたちや成人の方たち、またそのご家族の”リアルな世界”に長期にわたって参与しながら、様々な局面で現れる課題を分析し、解決への道筋を共に探ることを通じて、支援の在り方や発達障害とは何かということについて考えてきました。研究のスタイルとしては、アクション・リサーチ、質的研究がメインとなるかと思います。記憶障害などの高次脳機能障害のある方々とも同様の関わりを続けてきました。最近では、発達障害のある青年期の方々が充実した社会生活を送るために、学校卒業までに取り組むべき支援について、学校内外の様々な実践を通じて検討しています。

[指導テーマ]

- 発達障害者のストレスマネジメントに関する研究—ストレスマネジメント支援による行動・意識の変化過程—
- 発達障害児及び発達障害の疑いのある児童の在籍する通常学級担任が学級経営において感じる困難さに関する研究
- 大学生の障害児・者に対する態度に関する研究—潜在的・顕在的両態度と個人内要因とに着目して—

- 知的遅れのない発達障害者に対する就労支援について－インフォーマルコミュニケーション支援の効果について－
- 放課後デイサービス事業所における障害児の地域生活支援のための地域連携の実態と課題
- 障害児の居住地における関係性づくり－特別支援学校における居住地校交流の現状と課題－
- 交流及び共同学習の実態と課題－実施内容の計画過程における課題に着目して－

○川崎聡大 准教授

[研究内容]

限局性学習障害や自閉症スペクトラム障害児・者の特に言語や学習、コミュニケーション面に関する障害メカニズムや効果的な指導方法について研究しています。特に学習障害の1つであるディスレクシアに関しては実際の臨床場面も踏まえて神経心理学や脳科学の研究手法を用いてその実態を明らかにしたり、実際に子どもへの指導を通じて根拠に基づいた指導方法を確立すべく様々な研究に取り組んでいます。

また、保育園や小学校をフィールドとして「気になる子ども」の幼少期から児童期、成人期への発達経過を明らかにすること、発達段階に応じた認知機能と基礎的学習スキルや社会性ならびに学習到達度の関係など、広く対象に資する研究となるよう意識しています。また脳血管障害や認知症、脳腫瘍術後などの後天性高次脳機能障害に関する研究も行っています。

[指導テーマ]

発達障害領域に関する言語やコミュニケーションの発達や障害メカニズムに関する研究が主ですが、特に発達障害に特化せずに広く言語や学習、また脳機能や神経心理学・生理心理学に興味関心を持ってテーマを考える傾向にあります。研究手法は実験研究や調査研究、単一事例実験計画法に基づく事例研究などが主です。

- 共感性や内受容感覚に関する研究
- 自閉症スペクトラム障害者のネガティブ情動とそのメカニズム
- クロノタイプと課題遂行との関連の検討- 調査+認知実験
- 児童の共感性と学校生活スキルとの関連 調査研究
- 漢字書字に特異的な困難を示した自閉スペクトラム症1事例に対する書字指導 事例研究